

『朱子語類』訓門人訳注（一）

——卷一一五・第11条～第27条——

『朱子語類』訓門人研究会

はじめに

本稿は、二〇〇七年秋に発足した『朱子語類』訓門人研究会の成果である。本研究会は、筆者（垣内）が恩師の土田健次郎教授指導の後輩たちに声をかけ発足したもので、筆者が個人的に続けてきた『朱子語類』訓門人の訳注作成を共同で継続することを目指している。そのため、今回から掲載を開始する箇所は、筆者がすでに発表した部分に続くものとなっている。『朱子語類』訓門人の始まる巻一一三から巻一一五・第10条までについては、以下のものを参照されたい。

垣内景子『朱子語類』訳注（一）～（七）

『明治大学教養論集』通巻 318・327・339・358・376・390・411号

『朱子語類』の卷一一三から一二二に及ぶ「訓門人」は、『語類』の中でも朱熹と門人たちとの対話の様子を最も生き生きと伝えるものとされている。したがって、現代日本語訳によつて再現される彼らの会話も、その内容は当然のことながら、門人の個性に応じた朱熹の口調など会話全体の雰囲気が必要な要素となる。しかしながら、本稿は、各担当者が作成した原稿を研究会で共同に検討し、その結果を踏まえて各担当者が再作成した原稿をもとにして、訳文の語調等に不統一の感があることをあらかじめ断つておきたい。なお、担当箇所ごとに原稿作成者名を付した。

研究会の参加者は以下の通りである。(※は本稿の原稿作成者)

清水則夫(早稲田大学文学学術院講師)・※宮下和夫(早稲田大学大学院博士後期課程)・※阿部光麿(早稲田大学助手)・※大場一央(早稲田大学大学院博士後期課程)・※松野敏之(早稲田大学大学院博士後期課程)・※中嶋諒(早稲田大学大学院博士後期課程)・阿部亘(早稲田大学大学院修士課程)・佐々木仁美(早稲田大学大学院修士課程)・※梶田祥嗣(早稲田大学大学院修士課程)

本研究会は、今後末永く継続し、『朱子語類』訓門人の全訳を目指して、毎年本誌に一年分ずつ成果を発表してゆくつもりである。それは同時に、折しも昨年開始した『朱子語類』訳注刊行計画(汲古書院)に将来参加するための準備作業となると考えている。大方の皆様のご批判・ご指導を賜れば幸いである。

垣内景子(明治大学文学部教授)

凡例

※ 底本は、中華書局・理学叢書『朱子語類』を用いたが、標点等は適宜改めた部分もある。

※〔校注〕は以下の四本を参照し、各略称を用いた。

・『朝鮮古写 徽州本朱子語類』（中文出版社）……………楠木本

・『朝鮮整版 朱子語類』（中文出版社）……………朝鮮整版

・『朱子語類』（正中書局）……………正中書局本

・『朱子語類大全』（和刻本・中文出版社）……………和刻本

なお、次の字の異動については、一々注記しなかった。

「著」⇕「着」 「箇」⇕「个」 「辨」⇕「辯」

※原文・訳文中の「」は割り注部分である。

※〔注〕で用いた略称は以下の通り。

・『語類』……………『朱子語類』

・『遺書』……………『河南程氏遺書』（中華書局・理学叢書『二程集』）

・『門人』……………『朱子門人』（陳栄捷、台湾学生書局）

・『資料索引』……………『宋人伝記資料索引』（中華書局）

・『学案』……………『宋元学案』（中華書局）

【^(校1)一一五・11】

道夫⁽¹⁾以疑目質之先生。其别有九。

其一^(校2)曰「涵養體認致知力行、雖云互相發明、然畢竟當於甚處著力。」曰^(校3)「四者據公看、如何先後。」曰「據道夫看、學者當以致知爲先。」曰^(校4)「四者本不可先後、又不可無先後。須當以涵養爲先。若不涵養而專於致知、則是徒然思索。若專於涵養而不致知、却鶻突去了。以某觀之、四事只是三事。蓋體認便是致知也。」

〔校注〕

〔校1〕 楠本本は、本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

〔校2〕 楠本本は「其一」の前に「先生曰、正願得之」が入る。

〔校3〕 楠本本は「先生曰」に作る。

〔校4〕 楠本本は「先生曰」に作る。

〔訳〕

〔楊〕 道夫^{わたし}は疑問を箇条書きにして、先生に訊ねた。九条から成る。

その一「涵養・体認・致知・力行は、互いに相乗効果をもつにしても、結局は何処から着手すべきなのでしょうか」。

朱子「その四つは君から見ると、順序をどうするかね」。

道夫「私から見ますと、学ぶ者は当然、致知を先とするべきです」。

朱子「四つには本来、順序をつけられないが、順序は必ずついてしまう。涵養を先としなければならぬ。もし涵養をせずに致知に専念したならば、ただむなしく思索するだけだ。もし涵養に専念して致知をしなければ、それはそれで曖昧になっていってしまうだろう。私から見れば、この四つの事は三つの事だ。つまり体認は、致知に他ならないのだよ」。

〔注〕

(1) 道夫 楊道夫、字仲愚、一字仲思。『門人』二七二頁。『資料索引』三一八四頁。以下第29条まで

道夫に対する訓戒が続く

(2) 致知・力行 致知は『大学』八条目の一つ。力行は、『中庸』「好学近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇」。

二曰「居常持敬、於靜時最好、及臨時則厭倦。或於臨時時著力、則覺紛擾。不然、則於正存敬時、忽忽爲思慮引去。是三者將何以勝之。」曰「今人將敬來別做一事、所以有厭倦、爲思慮引去。敬只是自家一箇心常醒醒便是、不可將來別做一事。又豈可指擊踞曲拳、塊然在此、而後爲敬。」又曰「今人將敬・致知來做兩事。持敬時只塊然獨坐、更不去思量。却是今日持敬、明日去思量道理也。豈可如此。但一面自持敬、一面去思慮道理。二者本不相妨。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「則」を「或」に作る。

(校2) 楠本本は「覺」を「愈著」に作る。

(校3) 楠本本は「去」を「夫」に作る。

(校4) 楠本本は「先生曰」に作る。

〔訳〕

その二「平時に敬を持するのは、静の時には最も有効ですが、外物に対する際には面倒に感じます。一方、外物に対する時に力を入れるのでは、心が慌ただしくなります。そうでないとしても（前の二つのようでないとしても）、まさに敬を存する時に、たちまち思慮に引きづられてしまいます。この三つは、何によって克服しようとすればいいのでしょうか」。

朱子「いま人は、敬を取り上げて、何か特別の事と見做す。それ故に面倒であったり、思慮に引きづられたりするのだ。敬とは、自身の心が常に覚醒していることに他ならぬのであって、取り上げて何か特別の事と見做してはならぬ。また仰々しい姿勢を堅持して独り静かにいる状態を指して、それではじめて敬だなどと思つてよかろうか」。さらに続けて、「いま人は敬と致知とを取り上げて、二つの事であると思做し、敬を持する時はただ独り静かに坐し、それ以上に思索しようとしなさい。ちょうど、今日は敬を持して、明日は道理を思索しようという具合だ。そのようであつてよかろうか。一方では自ら敬を持し、もう一方では道理

を思索しようとするということだ。二つは本来、互いに妨げることはないのだよ。

〔注〕

(1) 常醒醒 朱熹は、敬を定義する際に、しばしば謝良佐の「敬是常惺惺法」(『上蔡語録』卷二)を用いる。

(2) 撃踞曲拳 「撃」は捧げ持つ。「踞」はひざまずく。「曲拳」は体を屈める。『莊子』内篇・人間世に「撃踞曲拳、人臣之禮也」とある。

(3) 塊然獨坐 『荀子』君道に「故天子不視而見、不聽而聰、不慮而知、不動而功、塊然獨坐而天下從之如一體、如四支之從心」とある。

三曰「人之心、或爲人激觸、或爲利欲所誘。初時克得下、不覺突起、更不可禁禦。雖痛遏之、卒不能勝。或勝之、而已形於辭色。此等爲害不淺。」曰「〔校〕只是養未熟爾。」

〔校注〕

〔校1〕 楠本本は「望先生明教。先生曰」に作る。

〔訳〕

その三「人の心は、他者に刺激されたり、利欲に誘惑されたりします。初めは克服できますが、不意に湧き起こり、それ以上は禦げません。痛切に抑制したとしても、結局は克服できません。また克服できても、

もう言葉や顔色に出てしまっています。こうした弊害は、浅からぬものです」。

朱子「ただ修養が熟していないだけだよ」。

四曰「⁽¹⁾知言云、天理人欲、同體而異用、同行而異情。⁽²⁾竊謂凡人之生、粹然⁽³⁾天理之心、不與物爲對。是豈與人欲同體乎。」曰「⁽⁴⁾五峰同體而異用一句、說得不是。天理人欲如何同得。故張欽夫⁽⁵⁾嶽麓書院記、只使他同行而異情一句、却是他合下便見得如此。他蓋嘗曰、凡人之生、粹然天地之心。道義完具、無適無莫。不可以善惡辨、不可以是非分、所以有天理人欲、同體而異用之語。⁽⁵⁾只如粹然天地之心、即是至善、又如何不可分辨。天理便是性、人欲便不是性。自是他合下見得如此。當時無人與他理會、故恁錯了。」

〔校注〕

(校1) 楠本本・正中書局本・和刻本は「竊」を「切」に作る。楠本本は前に「道夫」が入る。

(校2) 楠本本・和刻本は「天理」を「天地」に作る。

(校3) 楠本本は「五峰之言、必有深意。望先生詳論。先生曰」に作る。

(校4) 楠本本は「五峰天理人欲同體而異用、此一句」に作る。

(校5) 楠本本は「語」を「一語」に作る。

〔訳〕

その四『知言』に「天理と人欲とは、体は同じで用を異にし、軌跡は同じで実情を異にする」とありま

す。私が思いますに、すべて人の生まれつきは純粋な天理の心なので、物とは一対になりません。どうして人欲と体を同じくしましうか。

朱子「五峰（胡宏）の「体は同じで用を異にする」の一句は、誤って説いている。天理と人欲が、どうして同じであり得ようか。それ故に張欽夫（張栻）は『岳麓書院記』で、彼の「軌跡は同じで実情を異にする」の一句だけを用いているのだ。やはり彼（五峰）は、本来このような見解なのだ。彼はかつて「すべて人の生まれつきは純粋な天地の心である。道義は全て具わり、所謂「適無く莫無し（可も不可も無い）」だ。善悪や是非によつて辨別できない」と言っており、それ故に「天理と人欲とは、体は同じで用を異にする」なる言葉もあるのだ。もし「粹然たる天地の心」であるなら、これは至善である。どうして（人欲と）辨別できないであろうか。天理は性であり、人欲は性ではない。彼は本来このような見解なのだ。当時、彼に意見する者がおらず、それ故にこのように誤ってしまったのだよ。」

〔注〕

（1）知言云く同行而異情　胡宏（号五峰）『知言』卷一。朱熹『胡氏知言疑義』（『朱子文集』卷七三）参照。

（2）張欽夫嶽麓書院記、只使他同行而異情一句　張栻（字欽夫）『南軒集』卷一〇「潭州重脩嶽麓書院記」。「仁、人心也。率性立命、知天下而宰萬物者也。今夫目視而耳聽、口言而足行、以至於食飲起居之際。謂道而有外夫是、焉可乎。雖然天理人欲、同行異情、毫釐之差、霄壤之繆、此所以求仁之難、必貴於學以明之與」とある。

(3) 凡人の生ゝ不可以是非分 『知言』卷二。『胡氏知言疑義』参照。「無適無莫」は、『論語』里仁「君子之於天下也、無適也、無莫也。義之與比」。

五曰「遺書⁽¹⁾云、今志於義理、而心不安樂者、何也。此則正是剩一箇助之長。雖則心操之則存、舍之則亡、然而持之太甚、便是必有事焉而正之也、亦須且恁地去。如此者、只是德孤。德不孤、必有鄰。到德盛後、自無窒礙、左右逢其原也。」此一段多所未解。曰「這箇也自分明。只有「且恁地去」此一句難曉。其意只是不可說道持之太甚便放下了、亦須且恁持去。德孤、只是單丁有這些道理。所以不可靠、易爲外物侵奪。緣是處少、不是處多。若是處多、不是處少、便不爲外物侵奪。到德盛後、自然「左右逢其原」也。」

〔校注〕

(校1) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「於」を「于」に作る。

(校2) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「舍」を「捨」に作る。

(校3) 底本は「到得盛後」に作るが、楠本本・正中書局本・和刻本に従つて改めた。

(校4) 楠本本は「乞賜詳論。先生曰」に作る。

(校5) 楠本本は「遺書這个」に作る。

(校6) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「地」の字を欠く。

(校7) 楠本本は「難曉」の前に「教人」が入る。

〔訳〕

その五「『遺書』に「いま義理に志しながら心が安楽でないのは、何であろうか。これはまさに「助長」が残っているのである。心は「操れば則ち存し、舍つれば則ち亡ぶ」のではあるが、しかしあまり過度に持したのでは、これは「必ず事とすることあり」で「正め」してしまっているのに他ならない。とはいえ、とりあえずはそのようにしていくしかない。こうした者は、まだ「徳孤」にすぎない。（本来は『論語』にあるように）「徳は孤ならず。必ず隣有り」なのだ。徳が盛んになれば、自ずと障害はなくなり、「左右に其の原に逢う（日常の様々なこともすべて根源と合致する）」のである」とあります。この一節には解らないところが多いのですが。

朱子「これもまた、自ずから明白である。ただ「とりあえずはそのようにしていくしかない」の一句は理解しづらい。（程子の）「いわんとするところは、これ（心）を過度に持するようであるならすぐに放棄せよ」とは言えないから、とりあえずはそのようにするしかないと言ったのだ。「徳孤」では一人きりで一面的に道理を有しているに過ぎず、それ故に頼りなく、外物に（心を）奪われ易い。正しいところが少なく、誤りが多いからである。もし正しいところが多く、誤りが少なければ、外物に（心を）奪われない。徳が盛んになれば、自ずと「左右に其の原に逢う」のだよ。

〔注〕

（1）遺書云く左右逢其原也 『遺書』卷二上・第181条。『近思録』卷四にも収める。

（2）助之長 『孟子』公孫丑上「必有事焉而勿正、心勿忘、勿助長也。無若宋人然。宋人有閔其苗之不

長而擾之者、芒芒然歸、謂其人曰、今日病矣、予助苗長矣。其子趨而往視之、苗則槁矣。

(3) 操之則存、舍之則亡 『孟子』告子上に「孔子曰、操則存、舍則亡。出入無時、莫知其鄉。惟心之謂與」とある。

(4) 必有事焉而正之 注(2) 参照。

(5) 德不孤、必有鄰 『論語』里仁。また、『易経』坤卦・文言伝に「直、其正也。方、其義也。君子敬以直内、義以方外。敬義立而德不孤」とある。

(6) 左右逢其原 『孟子』離婁下「君子深造之以道、欲其自得之也。自得之則居之安、居之安則資之深、資之深則取之左右逢其原」。

(第11条前半担当 阿部 光麿)

六日「南軒答吳晦叔書云、反復其道、正言消長往來乃是道也。程子所謂聖人未嘗復、故未嘗見其心。蓋有往則有復。以天地言之、陽氣之生所謂復也。固不可指此爲天地心。然於其復也、可見天地心焉。蓋所以復者是也。在人^(復2)有失則有復。復、賢者之事也。於其復也、亦可見其心焉。竊謂聖人之心、天地之心也。天地之心可見、則聖人之心亦可見。况夫復之爲卦、一陽復於積陰之下、乃天地生物之心也。聖人雖無復、然是心之用、因時而彰。故堯之不虐、舜之好生、禹之拯溺、湯之救民於水火、文王之視民如傷、是皆以天地之心爲心者也。故聖賢之所推尊、學者之所師慕、亦以其心顯白而無暗曖之患耳。而謂不可見何哉。」曰「不知程子當時說如何、欽夫却恁說。大抵易之言陰陽、有指君子小人而言、有指天理人欲而言、有指動靜之機而言、初不

可以一偏而論。如天下皆君子而無小人、皆天理而無人欲、其善無以加。有若動不可以無靜、靜不可以無動、蓋造化不能以獨成。^(校5)或者見其相資而不可相無、遂以爲天下不可皆君子而無小人、不能皆天理而無人欲、此得其一偏之論。只如有不善未嘗不知、知之未嘗復行、此賢者之心、因復而見者。^(校6)若聖人則無此、故其心不可見。然亦有因其動而見其心者、正如公所謂堯之不虐、舜之好生、皆是因其動而見其心者。只當時欽夫之語、亦未分明。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「南軒先生」に作る。

(校2) 楠本本は「在其人」に作る。

(校3) 楠本本・正中書局本・和刻本は「竊」を「切」に作る。楠本本はこの前に「道夫」が入る。

(校4) 楠本本は「張先生發明程子之指。雖云昭著、然愚意終所未論。用敢其臆說、以求正於先生焉。先生

曰」に作る。

(校5) 楠本本は「而或者」に作る。

(校6) 楠本本は「此」を「夫」に作る。

(校7) 楠本本は「至若聖人」に作る。

〔訳〕

その六「南軒（張栻）の吳叔晦（翌）に答えた書簡には次のようにあります。「『易』復卦の）「反復こ

そが道である」とは、まさしく消長往来が道であることをいつている。一方程子は「聖人は復したことがない。故にその心を見たことがない」という。思うに、往が有れば復が有るということで、天地でいえば、陽気の生ずることが復であるが、もとよりこれを指して天地の心とすることはできない。しかし、この復において天地の心を見ることができなのだ。つまり、復する根柢がこれ（天地の心）なのである。人においては、失敗が有れば復する（恢復する）ということが有る。この場合の復とは賢者の範疇に属することである。この復（恢復）においてまたその心を見ることができる。「私見では、聖人の心は天地の心であります。天地の心を見ることができるのであれば、聖人の心も見ることができます。ましてそもそも復卦は、一陽が積陰の下に復しており、これこそが天地が物を生ずる心であります。聖人は復することが無いといつても、しかしながら心のはたらきは時によつて彰らかです。だからこそ堯は「虐げず」、舜は「生（の徳）を好み」、禹は溺れた者を拯い（治水に尽力し）、湯は「民を水火（の中）より救い」、文王は「民を視ること傷むが如くし」たのであり、これらはすべて天地の心をわが心としたものです。聖賢が推尊し、学ぶ者が師慕するものも、その心が潔白で暗く曖昧である患いが無いからです。それなのに、（程子が聖人の心を）見ることができないとしているのはどういふことなのでしょうか。」

朱子「程子が当時どういふ意図で説いたかは分からぬが、欽夫（張栻）はこのように解釈している。だいたい『易』で陰陽をいう時には、君子小人を指している場合、天理人欲を指している場合、動静の機を指している場合があり、初めから一方に偏つて論じてはならない。もし、天下すべて君子で小人は存在せず、すべて天理で人欲が無ければ、これ以上結構なことはない。しかし一方で（動静の観点からいうと）動は静が

無くてはならず、静は動が無くてはならないようなことがあるのは、やはり造化は独立しては成立不能ということなのである。それを誰かが、互いに他を不可欠としているのであるなら、結局天下はすべて君子で小人は存在しないわけにはいかないとか、すべて天理で人欲は無いというわけはいかないと考えるとしたら、それは一方に偏った極論である。ただ、(顔子の)「不善有れば未だ嘗て知らずんばならず、これを知れば未だ嘗て復た行わず」などは、これは賢者の心であつて、復(不善からの恢復)によつて見られるものだ。聖人の場合にはこういったことは無いので、したがつて(程子がいうように不善からの恢復としての)その心を見ることはできない。とはいへ、動の場面においてその心を見るといふのは、まさしく君のいう、堯が「虐げず」、舜が「生を好む」というようなもので、これらはすべて動の場面でその心を見るものである。ただ、当時の欽夫の語もはっきりとは分らない。」

〔注〕

(1) 南軒答吳晦叔書 『南軒集』卷一九「答吳晦叔」第六書に「反復其道、正言消長往來乃是道也。程子所謂聖人未嘗復、故未嘗見其心、蓋有往則有復、以天地言之、陽氣之生、所謂復也。固不可指此爲天地心。然於其復也、可見天地心焉。蓋所以復者是也。其在人、有失則有復。復賢者之事也。於其復也、亦可見其心焉。若夫聖人生知純全無俟乎復則何所見其心焉。妄意未知是否」とある。

(2) 反復其道 『易経』復卦本經に「復亨。出入无疾。朋來无咎。反復其道。七日來。復利。有攸往」とあり、彖伝に「象曰、復亨。剛反。動而以順行。是以出入无疾。朋來无咎。反復其道。七日來復。天行也。利有攸往。剛長也。復其見天地之心乎」とある。

(3) 程子所謂「故未嘗見其心」楊時『程氏粹言』卷二・天地・第16条「子曰、天地之心、以復而見。聖人未嘗復。故未嘗見其心」。

(4) 堯之不虐、舜之好生、禹之拯溺 『書經』大禹謨にそれぞれ「不虐無告」(堯)「好生之德洽于民心」(舜)「絳水傲予、成允成功」(禹)とある。

(5) 湯之救民於水火 『孟子』滕文公下「救民於水火之中、取其殘而已矣」。

(6) 文王之視民如傷 『孟子』離婁下「文王視民如傷、望道而未之見」。

(7) 有不善未嘗「未嘗復行」 『易經』繫辭下伝「子曰、顔氏之子、其殆庶幾乎。有不善未嘗不知、知之未嘗復行也」。

七曰、李延平⁽¹⁾教學者於靜坐時看喜怒哀樂未發之氣象爲如何。伊川謂既思⁽²⁾即是已發。道夫謂李先生之言、主於體認、程先生之言、專在涵養、其大要實相爲表裏。^(校1)然於此不能無疑。夫所謂體認者、若曰體之於心而識之、猶所謂默會也。信如斯言、則未發自是一心、體認又是一心、以此一心、認彼一心、不亦膠擾而支離乎。李先生所言決不至是。曰、李先生所言、自是他當時所見如此。問、二先生之說何從。曰、也且只得依程先生之說。^(校2)

〔校注〕

(校1) 楠本本は「大」を「夫」に作る。

(校2) 楠本本は、この前に「但道夫愚陋、切所未曉。幸先生詳教。先生」が入る。

〔訳〕

その七「李延平（侗）は学ぶ者に、静坐する時に喜怒哀楽未発の氣象がどうであるかを看させました。一方、伊川（程頤）は「喜怒哀楽の未発を看しようと」思ったからには已発である」と言います。私は、李先生の言葉は体認を主とし、程先生の言葉は専ら涵養に重点があり、その大要は実に互いに表裏を為していると考えます。しかし、ここで疑いが無いわけには参りません。そもそも体認というのは、心に体して知るところで、所謂黙会と同じことです。もしそうであるならば、未発であるのも一つの心、体認するのも一つの心であり、この心でもつてかの心を認識することになり、やはり心が分裂してごたごたしてしまうのではありませんか。李先生の言葉は、決してこの問題にまで説き及んでいないと思うのですが。」

朱子「李先生の言葉は、先生ご自身が当時そのように理解されていたということだ。」

道夫「両先生の説はどちらに従うべきでしょうか。」

朱子「とりあえず程先生の説に依るしかならう。」

〔注〕

(1) 李延平く未発之氣象爲如何 李侗（延平）は程氏高弟の羅從彦より静坐重視の修養を授けられ、若き日の朱熹にも静坐を中心とした「未発の氣象の体認」を教示した。『延平答問』上巻・第25条参照。

(2) 既思即是已發 『遺書』卷一八・第82条「或曰、喜怒哀楽見發之前求中、可否。曰、不可。既思於喜怒哀楽未發之前求之、又却是思也。既思即是已發」。

八問、邵康節男子吟⁽¹⁾。曰、康節詩乃是說先天圖中數之所從起處⁽²⁾。天根月窟⁽³⁾、指復姤二卦而言。

〔校注〕

(校1) 楠本本は、この前に「先生」が入る。

(校2) 楠本本は、「先天」の前に「他」が入る。

〔訳〕

その八、邵康節(雍)の「男子吟」を問う。

朱子「康節の詩は「先天図」中の数が起ころを説いている。「天根月窟」というのは、復・姤の二卦を指して言っている。」

〔注〕

(1) 男子吟 邵雍『擊壤集』卷二「欲作一男子、須了四般事。財能使人貪、色能使人嗜、名能使人矜、勢能使人倚。四患既都去、豈在塵埃裏」。

(2) 先天圖 伏羲先天卦位図のこと。『皇極經世書』に於いて邵雍が定めた。朱熹は『周易本義』でこれを採用する。

(3) 天根月窟 『擊壤集』卷二「觀物吟」に、「耳目聰明男子身、洪鈞賦與不爲貧。因探月窟方知物、未躡天根豈識人。乾遇巽時觀月窟、地逢雷處看天根。天根月窟閒來往、三十六宮都是春。淳厚之人少秀慧、秀慧之人少審諦。安得淳厚又秀慧、與之共話人間事」とある。「乾遇巽」は『易經』象伝「天下有

「風姤」を、「地逢雷」は同じく「雷在地中復」を指す。『語類』卷一〇〇・第50／51条参照。

九問、濂溪遺事載邵伯溫(1)記康節論天地萬物之理、以及六合之外。而伊川稱歎。東見錄云、人多言天地外、不知天地如何說内外。外面畢竟是箇甚。若言著外、則須似有箇規模。此說如何。曰、六合之外、莊周亦云、(4)聖人存而不論。以其難說故也。舊嘗見漁樵問對。(5)問、天何依。曰、依乎地。地何附。曰、附乎天。天地何(3)所依附。曰、自相依附。天依形、地附氣。其形也有涯。其氣也無涯。意者當時所言不過如此。某嘗欲注此語於遺事之下。欽夫苦不許、細思無有出是說者。因問、向得此書、而或者以爲非康節所著。先生曰、其間儘有好處。非康節不能著也。「以下訓道夫。」

〔校注〕

〔校1〕 楠本本は、この前に「伏乞明教。先生」が入る。

〔校2〕 楠本本は「是以其難說故也」に作る。

〔校3〕 楠本本・正中書局本は「對問」に作る。

〔校4〕 楠本本は、この前に「曰」が入る。

〔校5〕 楠本本は、この前に「曰」が入る。

〔訳〕

その九「『濂溪遺事』には、康節（邵雍）が天地万物の理を論じて六合（天地四方）の外にまで及び、伊

川（程頤）がそれを称嘆したことを邵伯温が記したと載せております。一方、『遺書』の東見録には「人は多く天地の外をいうが、天地についてどうして内外を語ることができようか。（天地の外とは結局何なのだろうか。外をいうならば、（天地には一定の）規模が有るようになってしまふ」とあります。これらの説は如何でしょうか。」

朱子「六合の外は莊周も「聖人は存して論ぜず」といつている。語り難いからだ。以前『漁樵問対』を見たが、「天は何に依るか。地に依る。地は何に附くか。天に附く。天地はどこに依つて附くか。それ自体相寄り付き合っている。天は形に依り、地は氣に附く。形には涯が有り、氣には涯が無い」というもので、當時の言い方としてはこれが精一杯であったのだ。私は以前この言葉を『遺事』の下に注記しようとしたが、欽夫（張栻）がどうしても許さなかつた。今精察してみると、この言葉以上のものは無さそうだ。」

そこで質問した。

道夫「以前この書を入手しましたが、康節が著述したのではないという者がいました。」

朱子「この書の中にはまま良いところもある。康節でなければ書けないものだ。」

〔この条以下、楊道夫への訓戒。〕

〔注〕

（1）濂溪遺事 『周敦頤集』卷三「遺事」に「邵伯温作易學辨惑記康節先生事、曰、伊川同朱光庭公拔

訪先君、先君留之飲酒。因以論道。伊川指面前食卓曰、此卓安在地上、不知天地安在甚處。先君爲極論

天地萬物之理、以及六合之外。伊川歎曰、平生惟見周茂叔論至此」（中華書局・理学叢書）とある。こ

の理学叢書本は清の賀瑞麟『周子全書』を底本としているが、賀氏の依る本も既に朱熹の手が入ったものであるから、これを根拠に朱熹が当該発言に及んでいるという確証はない。

(2) 邵伯温 一〇五七〜一一三四、字子文。邵雍の子。『資料索引』一三三〇頁、『宋史』卷四三三、『学案』卷一〇。

(3) 東見録 『遺書』卷二上「元豊己未呂與叔東見二先生語」第144条。

(4) 莊周亦云、聖人存而不論 『莊子』内篇・齊物論「六合之外聖人存而不論。六合之内聖人論而不議」。

(5) 漁樵問對 邵雍著。叢書集成本では『漁樵對問』と題し、当該部分を「樵者問漁者曰、天何依。曰、依乎地。地何附。曰、附乎天。曰、然則天地何依何附。曰、自相依附。天依形、地附氣。其形也有涯。其氣也無涯」に作る(傍線部は相違部分)。「語類」卷一〇〇・第26〜29条参照。

(第11条後半担当 大場 一央)

【一五・12】

請問爲學之要。曰「公所條者便是、^(校2)須於日用間下工、只恁說歸虛空、不濟事。^(校3)温清定省、這四事亦須實行、方得。只指摘一二事、亦豈能盡。若一言可盡、則聖人言語豈止一事。聖人言語明白、載之書者、不過孝弟忠信。其實精粗本末、祇是一理。聖人言致知・格物、亦豈特一二而已。如此則便是德孤。^(校4)致、推致也。格、到也。亦須一一推到那裏、方得。」又曰「爲人君、止於仁、姑息也是仁、須當求其所以爲仁。爲臣、止於敬、擊踈^(校5)

曲拳也是敬、亦當求其所以爲敬。且如公自浦城來崇安、亦須偏歷崇安境界、方是到崇安。^(校6) 人皆有是良知、^(校8) 而前此未嘗知者、只爲不曾推去爾。愛親從兄、誰無是心。於此推去、則溫清定省之事、亦不過是愛。自其所知、推而至於無所不知。皆由人推耳。^(校8) 子昂曰「敢問推之之說。」曰「且如孝、只是從愛上推去、凡所以愛父母者、無不盡其至。不然、則曾子問孝至末梢、卻問子從父之令、可以爲孝乎。蓋父母有過、己所合諍、諍之亦是愛之所推。不成道我愛父母、姑從其令」。^(校10)

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 楠本本は「道夫請」に作る。

(校3) 楠本本は「先生曰」に作る。

(校4) 楠本本は「大凡須是於日用間下工」に作る。

(校5) 楠本本・正中書局本は「爲」を「如」に作る。

(校6) 楠本本は「是」を「且」に作る。

(校7) 楠本本は「大凡人」に作る。

(校8) 楠本本は「良知」を「真知」に作る。

(校9) 楠本本は「先生曰」に作る。

(校10) 楠本本・正中書局本・和刻本は「合」を「當」に作る。

学問の要点について質問した。

朱子「君が挙げている通りでよいのだが、日常の中で実際に努力していかなければならないのであって、ただそのように口で言うだけで空虚になってしまっていては、何の役にも立たない。『礼記』の、子の親に対する気遣いとしての）冬には暖かに、夏には涼しく、夜には寝具を整え、朝には安否を問うなどの四者もまた、実行してこそ意味があるのだ。ただ一つ二つのことを指摘するだけで、どうして尽くすことができようか。もしも一言で尽くすことができたとしても、聖人の言葉は、どうしてたった一つのことだけに止まるか。たしかに聖人の言葉は明快で、経書の記載もつきつめれば「孝悌忠信」に過ぎない。実際には精粗本末（多様な事柄）があるものの、同じ一つの理に過ぎない。けれども聖人が「致知」「格物」というのもまた、どうしてたった一つ二つだけのことに止まるか。そうであるならば、「徳、孤なり」ということになってしまう。「致知の）致」とは、推し致すということ、「格物の）格」とは到るということである。逐一そこまで推し到って、はじめてうまくいくのである。」

さらに話は続く。

朱子「人君と為りては、仁に止まる」とあるが、（仁を単に慈愛の意味にのみ表面的に理解すると）無原則な寛容さもまた仁であるとなり兼ねないので、必ず仁の根柢を求めなければならない。「臣と為りては、敬に止まる」とあるが、（敬を単に形式的な厳肅さと理解すると）仰々しくすることもまた敬であるとなり兼ねないので、必ず敬の根柢を求めなければならない。例えば君が浦城から崇安にやって来るのであれば、

崇安の領域内をあちこちめぐって、はじめて崇安に到ったことになる。人にはみな良知があるのだが、そのことがいまだ分からないでいるのは、ただ推し究めて考えたことがないからに過ぎない。親を愛することや兄に従うことは、誰一人としてこのような心を持たないものはない。このことから推し究めていけば、冬には暖かに、夏には涼しく、夜には寝具を整え、朝には安否を問うこともまた、この（誰もが持っている親に對する）愛に過ぎないのである。知っているとところから推していき、知らないところが無いところにまで至る、全ては人の推し究めるか否かに拠るのである。」

子昂（楊驥）「推すという説について、あえて質問致します。」

朱子「例えば孝というのは、ひたすら愛から推していき、全て父母を愛することにおいて、尽くさないことがないようにすることである。そうでなければ、曾子が孝について質問し、最後になって、「子、父の令に従うは、以て孝たるべけんや」と質問したことのようになってしまふ。やはり父母にも過失はあるのだから、自分として諫めるべきところは諫めていくのが、愛を推していくことなのだ。まさか、自分は父母を愛しているのだから、ただただ何も考えずにその命令に従うというわけにはいくまい。」

〔注〕

(1) 温清定省 『礼記』曲礼上「凡爲人子之禮、冬温而夏清、昏定而晨省。」

(2) 致知格物 いずれも『大学』八条目の一つ。

(3) 徳孤 『論語』里仁「徳不孤、必有鄰。」

(4) 爲人君、止於仁／爲臣、止於敬 『大学』（章句伝三章）「詩云、穆穆文王、於緝熙敬止。爲人君止

於仁、爲人臣止於敬、爲人子止於孝、爲人父止於慈、與國人交止於信」。

(5) 姑息 無原則な寛容さ。『礼記』檀弓上「君子之愛人也以德、細人之愛人也以姑息」。『語類』卷六

三・第34条「仁少差、便失於姑息、敬少差、便失於沽激」。

(6) 擊踞曲拳 第11条に既出。本稿四一頁・注(2)参照。

(7) 自浦城來崇安 浦城、崇安ともに福建路建寧府の県名。楊道夫は、浦城の人。楊道夫の師事年代は、

田中謙二「朱門弟子師事年攷」に拠れば、淳熙十六(一一八九)年から紹熙三(一一九二)年まで、また同席する楊驥の師事年代は、「朱子語録姓氏」に拠れば、淳熙十六年及び紹熙五(一一九四)年、したがってこの条は、淳熙十六年の記録であろう。淳熙十六年当時、朱熹は崇安の南方に位置する武夷精舎にあって、また方彦寿『朱熹書院与門人考』一一一頁では、楊道夫を朱熹の武夷精舎での門人とし、さらにこの条を取り上げ、「崇安」を「武夷精舎」として解釈している。

(8) 子昂 楊驥、子昂は字。楊道夫の従兄。『門人』二七五頁。『資料索引』三二四八頁。

(9) 子從父之令可以爲孝乎 『孝経』諫諍「曾子曰、若夫慈愛恭敬安親揚名、則聞命矣。敢問、子從父之令、可謂孝乎。子曰、是何言與。是何言與。昔者天子有爭臣七人、雖無道、不失天下。諸侯有爭臣五人、雖無道、不失其國。大夫有爭臣三人、雖無道、不失其家。士有爭友、則身不離於令名。父有爭子、則身不陷於不義。故當不義、則子不可以不爭於父、臣不可以不爭於君。故當不義則爭之、從父之令、又焉得爲孝乎」。

(第12条担当 中嶋 諒)

問「向見先生教童蜚卿於心上著工夫。數日來專一靜坐、澄治此心。」曰「若如此塊然都無所事、却如浮屠氏矣。所謂存心者或讀書以求義理、或分別是非以求至當之歸。只那所求之心、便是已存之心。何俟塊然以處而後爲存耶。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 楠本本は「先生曰」に作る。

〔訳〕

質問「以前、先生が童蜚卿(童伯羽)に心に関して修養するよう教えておられるのを拝見し、それでの数日来、静坐に専念し、心を清澄にするよう努めてみました。」

朱子「そのようにじっとしているだけで他に何も行わないのであれば、それでは仏門の輩と同じだ。(孟子の)所謂「心を存す」とは、読書して義理を求めたり、是非を弁別して正しい道理の帰着点を求めたりすることである。ただその求めている心こそが、存している心なのだ。どうして何もしないでじっとして、それが「存する」ことだなどということがあろうか。」

〔注〕

(1) 童蜚卿 童伯羽、字蜚卿。『門人』二四七頁、『資料索引』二七八四頁。

(2) 存心 『孟子』 尽心上。

【^(校1)一一五・14】

大率爲學雖是立志、然書亦不可不讀、須將經傳本文熟復。如仲思早來所說專一靜坐、如浮屠氏塊然獨處、更無酬酢、然後爲得。吾徒之學、正不如此。遇無事則靜坐、有書則讀書、以至接物處事、常教此心光暗、地、便是存心。豈可凡百放下、祇是靜坐。向日蜚卿有書、亦說如此。某答之云「見有事自那裏過、却不理會、却只要如此、如何是實下工夫。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 楠本本は「如」を「正如他」に作る。

(校3) 楠本本は「接物」の前に「於」が入る。

(校4) 和刻本は「某」を「其」に作る。

(校5) 楠本本は「有」を「其」に作る。

〔訳〕

おおよそ学問を修めるには、志を立てることが肝要とはいえ、書物も読まなければならないし、経伝の本

文を繰り返し熟読する必要がある。仲思（楊道夫）が先ほど説いていた静坐に専念するというのは、仏教徒達が、独りでじつと留まつてそれ以上のやりとりを持たず、それではじめて何かを得たと言っているのと同じである。吾儒の学は、そうではない。とりたてて事とすることが無い時には静坐し、書物がある時には読書して、事物に応接対処する段に至れば、常にこの心をきらきらと覚醒させる、これこそが「心を存する」ということである。どうして様々なことを放り出して、ただ静坐だけでよいということがあろうか。先日、蜚卿（童伯羽）からも書簡が届き、同じようなことを言ってきた。それに対しては、「物事がどこから自分の目の前にやってくるのに対応しようともせず、ただそんなふう（静坐を）しているだけで、どうして実際に修養を行えるだろうか」と答えておいた。

〔注〕

（1） 暗暗 「暗」字は、諸本に異同はないが、『大漢和辞典』『漢語大詞典』『漢語大字典』『中華大字典』や異体字字典の類には検し得ない。文脈からの類推で解釈した。

【一五・15】

「大凡人須是存得此心。此心既存、則雖不讀書、亦有一箇長進處。纔一放蕩、則放下書冊、便其中無一點學問氣象。舊來在某處朋友、及今見之、多茫然無進學底意思、皆恁放蕩了。」道夫曰「心不存、雖讀萬卷、亦何所用。」曰「若能讀書、就中却有商量。只他連這箇也無、所以無進處。」道夫曰「以此見得孟子求放心

之說緊要。」曰「如程子所說敬字、亦緊要也。」(校3)

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 楠本本は「朋友」の二字を欠く。

(校3) 楠本本は、末尾に「此併前段蓋先生自政和縣省墓回因言之」の割注が入る。

〔訳〕

朱子「おおよそ人は心を存しなればならない。この心が存していれば、たとえ読書をしなくても、長足なる進歩もあろう。しかし僅かでも心を放埒にしまえば、書物を手放した途端そのままほんの少しの学問の気象もなくなってしまう。以前私の所に居た朋友達も、今から見ても、ほとんどぼんやりとしていて学問に進む様子などなく、すっかりこのように心を放埒にしまっていた。」

道夫「心が存していなければ、たとえ万巻の書を読もうとも、何の役に立ちましよう。」

朱子「しかし、読書ができるのであれば、その中からまだ議論の余地も出てくるだろう。ただ彼等はそれすらないから、進歩するところがないのだ。」

道夫「今のお話で孟子の「放心を求む」の説の重要性が理解出来ました。」

朱子「程子が言われた「敬」もまた重要だ。」

〔注〕

- (1) 有商量 「商量」は「相談する、話し合う、議論する」の意味の他、「考え、やりかた、方法」の意味もある。ここでの意味は、「読書ができるのであれば、心が多少ぼんやりしてしまつたとしても」どうしたらよいかと考えたり議論したりする余地や術がある」ということか。『語類』中の同様の用例は以下の通り。「其道學問、盡精微、道中庸等工夫、皆自此做、儘有商量也」(卷一一・第33条)、「又有一般全不做功夫底、更没下手商量處。又不如彼胡亂做工夫、有可商議得」(卷一一八・第32条)。
- (2) 孟子求放心 『孟子』告子上「學問之道無他、求其放心而已矣」。

【一・一五・16】

問^(校2) 「尋常操存處、覺纔著力、則愈紛擾、這莫是太把做事了。」曰「自然是恁地。能不操而常存者、是到甚麼地位。孔子曰、操則存、舍則亡。操、則便在^(校3)這裏。若著力去求、便蹉過了。今若說操存、已是剩一箇存字、亦不必深著力。這物事本自在、但自家略加提省、則便得。必有事焉、而勿正、心勿忘、勿助長也。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 楠本本は「道夫問」に作る。

(校3) 楠本本は「這裏若著力去求便蹉過了今若說操存已是剩」の十九字無し。

〔訳〕

質問「平生、（心を）操り、存することにおいて、少しでも力を入れれば、ますます混乱してしまうのですが、これは意識して取り組み過ぎなのでしょうか。」

朱子「自然とそうなるものだよ。操らずに（意識的に心をコントロールしようとせずに）常に存することができる人は、いったいどんな境地に辿り着いているのだろうね。孔子は「操れば則ち存し、舍つれば則ち亡」と言っている。（心を）操れば、（心は）すぐにここにあるものなのだ。もし殊更に努めて求めていたならば、誤ることになる。いま「操り」「存す」というと、すでに「存す」という言い方が余分なのであり、必ずしも深く力を注ぐものではない。この心というものは、本来自ずから存しているのだから、ただ自身でちよつと呼び起こしさえすればよいのだ。（孟子のいう）「必ず事とする有りて、正にする勿かれ、心に忘るること勿かれ、助長すること勿かれ」ということだ。」

〔注〕

（1）孔子曰、操則存、舍則亡 『孟子』告子上。本稿四六頁・注（3）参照。

（2）必有事焉、勿助長也 『孟子』公孫丑上。本稿四五頁・注（2）参照。

（第13〜16条担当 松野敏之）

問「處鄉^(校2)邨宗族、見他有礙理不安處、且欲與之和同、則又不便。欲正己以遠之、又失之孤介而不合中道、如何。」曰「這般處也是難、也只得無忿疾之心爾」。

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 朝鮮整版は「邨」を「黨」に作る。

(校3) 楠本本は「欲」の前に「方」が入る。

〔訳〕

質問「同郷の者たちと一緒に居て、彼らに道理に反して不安定なところが見えた場合、それでもとりあえず彼らに合わせて親しく付き合おうとするのはやはり良いことではありますまい。かといって、己を正して彼らを遠ざけようとするれば、また孤立して心が狭くなってしまう、中庸の道から外れてしまいます。どのようにするべきでしょうか。」

朱子「そういったこともやはり大変難しい。ただむやみに憤ったり憎んだりする気持ちを持たないようにするだけだ。」

【一・一五・18】^(校)

先生一日謂蜚卿(校)與道夫曰「某老矣。公輩欲理會義理、好著緊用工、早商量得定、將來自求之、未必不得。然早商量得定、尤好。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 正中書局本・和刻本・楠本本は「蜚卿」を「飛卿」に作る。

〔訳〕

先生はある日、蜚卿(童伯羽)と道夫(わたし)にこうおっしゃった。「私は年老いてしまった。君達は義理を理解しようとするなら、十分にしっかりと修練して、早めに皆で議論して意見を定めることだ。これから先、自分で追求していっても(義理に対する理解が)得られないわけではないが、しかし、早く皆で議論をして意見を定めるにこしたことはない。」

【一・一五・19】^(校)

道夫辭拜還侍、先生曰「更硬著脊梁骨」。

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

〔訳〕

道夫わたしが暇乞いをするもまだ帰らずにいると、先生はおっしゃった。

朱子「もつと背筋をしゃんと伸ばしなさい。」

〔注〕

(1) 硬著脊梁骨 『遺書』卷三・第32条「士不可以不弘毅、任重而道遠。重擔子、須是硬著梁漢、方擔得」。『語類』卷三五・第100条「士不可以不弘毅。先生舉程先生語曰、重擔子、須是硬著脊梁骨、方擔荷得去」。

〔一五・20〕^(校)

道夫問「劉季文1所言心病、道夫常恐其志不立。故心爲氣所動。不然、則志氣既立、思慮凝靜。豈復有此」。

曰「此亦是不讀書、不窮理。故心無所用、遂生出這病。某昨日之言、不曾與說得盡」。道夫因言「季文自昔見先生後、敦篤謹畏。雖居於市井、人罕有見之者。自言向者先生教讀語孟、後來於此未有所見、深以自愧。

故今者復來」。曰「得他恁地也好。或然窮來窮去、久之自有所見、亦是一事」。又曰「讀書須是專一、不可支蔓。且如讀孟子、其間引援詩書處甚多。今雖欲檢本文、但也只須看此一段(校)、便依舊自看本來章句。庶幾此

心純一」。道夫曰「此非特爲讀書之方、抑亦存心養性之要法也」。

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 楠本本は「此段」に作る。

〔訳〕

道夫わたし「劉季文りゅうせいぶん(劉黻)の言う心の病は、私は常々彼の志が立っていないからではないかと思っております。志が立っていないから、心が氣に動かされるのです。そうでなければ、志氣がすで立っている以上、思慮も落ち着いているはず、どうしてまたそのような心の病がありましょうか。」

朱子「これもまた読書をせず、理を究めないからだ。それ故心が正しく用いられず、結局はそういった病が出てくるのだ。私のこれまでの発言は、このことを充分に説き尽くしていなかった。」

道夫「季文は以前先生にお目にかかつて以後、極めて慎み深い生活を送り、街中に住んでいても、人は滅多に彼を見かけませんでした。季文自身が申すことには、以前先生より『論語』『孟子』を読むよう教わりましたが、その後まだ理解できるところがなく、深く恥じ入り、それ故再び参上したということでした。」

朱子「彼がそういうふうな段階に至りここへ再びやつて来たというのも結構なことだ。しかしまた、繰り返し徹底的に追究して、久しく続けた後に自分で理解するのもまた一つののだがね。」

朱子「読書は專一にすべきで、散漫ではいけない。例えば『孟子』を読むと、文中に『詩経』や『尚書』が多く引用されている。その場合『詩経』や『尚書』の本文を調べたいと思うだろうが、とりあえずは引用

されたその一段だけを見て、もとの『孟子』の本文を見るようにすべきだ。そうすればこの心は純一に保つことができるのだ。」

道夫「今のお話は読書の方法に止まるものではありません。『孟子』の「心を存し、性を養う」重要な方法でもありません。」

〔注〕

(1) 劉季文 劉黻、一字靜春。『門人』三一八頁。『資料索引』三九〇七頁。『語類』卷六二・第77条に「劉黻問、不知無事時如何戒慎恐懼。若只管如此又恐執持太過、若不如此、又恐都忘了。曰、也有甚麼矜持。只不要昏了他、便是戒懼」との問答がある。

(2) 存心養性 『孟子』尽心上「存其心、養其性、所以事天也」。

【一・一五・21】^(校)

問「向者以書言仁、雖蒙賜書有進教之意。然仁道至大、而道夫所見、只以存心爲要、恐於此當更有恢廣功夫」。曰「也且只得恁做去、久之自見」。頃之、復曰「這工夫忙不得。只常將上來思量、自能有見。橫渠云、蓋欲學者存意之不忘、庶游心浸熟、有一日脫然如大寐之得醒耳。」

〔校注〕

(校1) 本条は、前後の条を多く収める楠本本巻一一四には見えない。

(校2) 正中書局本・朝鮮整版は「工夫」を「功夫」に作る。

〔訳〕

質問「以前、お手紙にて仁を論じたところ、先生よりお手紙を頂戴しご教示を賜りました。しかしながら、仁の道は極めて広大です。私が見ますところ、ただ「存心（本来の心を保持する）」が重要かと存じます。それを更に拡大する修養をしなければならぬのではないのでしょうか。」

朱子「とりあえずしばらくは今のままやってゆくしかない。続けていけば自ずと見えてくるだろう。しばらくして、

朱子「この修養は急いではいけない。ただ常に頭の中で意識して考えるようにしていれば、自ずと分かってくるだろう。横渠（張載）はこう言っている「字ぶ者には常に意識して忘れないようにし、心をゆったりさせて、しだいに深く理解していくようにしてもらいたい。そうすれば、深い眠りから醒めるかのように、ある日突如として見通しが開けるだろう。」

〔注〕

(1) 横渠云く如大寐之得醒耳 『近思録』巻二・論学、『張載集』拾遺・第1条。

(第17〜21条担当 梶田 祥嗣)

【一五・22】

先生問「別看甚文字。」曰「只看近思錄。今日箇箇、明日復將來溫尋、子細熟看。」曰「如適問所說元亨利貞、是一箇道理之大綱目、須當時復將來子細研究。如濂溪通書、只是反復說這一箇道理。蓋那裏雖千變萬化、千條萬緒、只是這一箇做將去。」

〔校注〕

〔校一〕本条は、前後の条を多く収める楠本本卷一一四には見えない。

〔訳〕

朱子「他にどんなものを読んでいるかね。」

道夫「『近思錄』を読んでいます。今日読んで問題にした部分を翌日再び復習して、細かに熟読しています。」

朱子「さきほど説明した「元亨利貞」は、一つの道理の大綱目である。適宜振り返って細かく研究しなければならぬ。濂溪（周敦頤）の『通書』も繰り返してこの一つの道理を説いている。つまりはどれだけ多くの変化や端緒があっても、ただこの道理が展開したものに他ならないのだ。」

〔注〕

（一）元亨利貞 『易経』乾卦。

【一・五・23】

問^(校2)「敬而不能安樂者、何也。」曰「只是未熟在。如飢而食、喫得多、則須飽矣。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 楠本本は「道夫問」に作る。

〔訳〕

質問「敬しているのに、そこに安んじ楽しむことができないのは、どういうことでしょうか。」

朱子「それはまだ未熟だということだ。「飢えて食らうが如し」、たくさん食べれば必ず満腹になる（ように敬することに慣れば自然に安んじ楽しむことができる）ものだよ。」

〔注〕

(1) 如飢而食 『大戴礼記』主言第三九に「其博有萬民也、如飢而食、如渴而飲、下土之人信之夫」とある。

【一・五・24】

問^(校2)「道夫在門下雖數年、覺得病痛尚多。」曰「自家病痛、他人如何知得盡。今但見得義理稍不安、便勇決^(校5)

改之而已。」久之、復曰「看來用心專一、讀書子細、則自然會長進、病痛自然消除。」

〔校注〕

〔校1〕楠本本は本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める

〔校2〕楠本本は「道夫問」に作る。

〔校3〕楠本本は「尚」を「甚」に作る。

〔校4〕楠本本は「今但」を「但今」に作る。

〔校5〕楠本本は「勇決改之」を「勇法而改之」に作る。

〔訳〕

道夫「私は先生の門下に数年居りますが、まだまだ多くの欠点があるように感じています。」

朱子「自分の欠点は他人にどうやって知り尽くすことができよう。義理の了解がやや不安定ならば、立ち向かい決断して改めていくだけだ。」

しばらくして

朱子「私が思うに、心の用い方を専一にし、細かに読書してゆけば、自然に必ず成長し、欠点も自然に消えてゆくものだよ。」

於今為學之道、更無他法、但能熟讀精思、久久自有見處。「尊所聞、行所知」、則久久自有至處。「若海」蜀本作道夫錄。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 楠本本は割り注「若海く道夫録」部分を「以上並道夫自録」に作る。

〔訳〕

いま学問をする道に他の方法は無い。ただ熟読・精思し続けてゆけば、いつの日か自然と了解するところがあるだろう。「聞く所を尊び、知る所を行う」、このようにしてゆけばいつか自然と到達するところがあるだろう。「記録者楊若海。蜀本では道夫の記録としている。」

〔注〕

(1) 尊所聞、行所知 『大戴礼記』曾子疾病第五七「言不遠身、言之主也。行不遠身、行之本也。言有主、行有本、謂之有聞矣。君子尊其所聞、則高明矣。行其所聞、則廣大矣、高明廣大、不在於他、在加之志而已矣」。董仲舒「对策」もこの語を引く。これを踏まえて『程氏外書』卷七別本拾遺に「崇慶黨禁方嚴、子徙居龍門之南、止南方學者曰、苟能尊所聞、力行所知、則可矣。不必及門也」とある。

(2) 若海 楊若海。楊道夫の子。『門人』二七〇頁。

仲思言「正大之體難存。」^(校1)曰「無許多事。古人已自說了、言語多則愈支離。如公昨來所問涵養、致知、力行三者、便是以涵養做頭、致知次之、力行次之。不涵養則無主宰。如做事須用人、纔放下或困睡、這事便無人做主、都由別人、不由自家。既涵養、又須致知。既致知、又須力行。若致知而不力行、與不知同。亦須一時並了、非謂今日涵養、明日致知、後日力行也。要當皆以敬為本。敬却不是將來做一箇事。今人多先安一箇敬字在這裏、如何做得。敬只是提起這心、莫教放散。恁地、則心便自明。這裏便窮理、格物、見得當如此便是、不當如此便不是。既見了、便行將去。今且將大學來讀、便見為學次第、初無許多屈曲。」^(校2)又曰「某於大學中所以力言小學者、以古人於小學中已自把捉成了、故於大學之道、無所不可。今人既無小學之功、却當以敬為本。」^(校3)〔驥〕

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

(校2) 楠本本は「難存」を「常存」に作る。

(校3) 楠本本は「如」の上に「只」が入る。

(校4) 楠本本は「這裏」の上に「自」字が入る。

(校5) 底本は「見」を「是」に作る。本条では楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本に従い「見」に改めた。

〔訳〕

道夫「正大」の体を存するのは難しいですね。」

朱子「複雑なことではないよ。これは古人が既に説明してくれているのだから、更に言説を多く費やして説明しようとする、ますます滅茶苦茶になってしまふものだ。君がこの前質問した「涵養」「致知（知を窮め致す）」「力行（努力して実行する）」の三者は、涵養を起点にして、致知、更に力行へと進むのだ。涵養をしないと主宰するものが無くなってしまふ。それは例えば、物事を行うのに他人を用いなければならぬ場合に、主宰者である自分が少しでも放置したりウトウトと眠ってしまうと、その物事は主となる人が居なくなつて全て他人任せになつてしまひ、自分によつては行われぬようなものだ。涵養した上で更に知を窮めねばならず、致知をなした上で更に努力して実行しなければならぬ。もし知を窮めても実行しないのであれば、それは知らないに等しい。また、これら三者は同時並列で進めるもので、今日は涵養、明日は致知、その後日に力行というわけではない。すべて「敬」を根本にしなければならぬ。しかし敬というものを一つの何かの事柄と捉えるのではない。今の人は多くはまず先にこの「敬」字を心に据え付けようとするが、そんなことはできるわけがない。敬というのは単にこの心呼び起こして、放漫・散逸にさせないといふだけだ。このように心が呼び起こされていれば、心は自ずと明瞭なのである。この状態で窮理格物を行い、当然そうすべきものは正しく、そうすべきではないものは間違つてゐるということが了解される。了解されたらその通りに行つてゆく。たとえば『大学』を読んでみれば、学問を為す課程が元来屈折して複雑なものではないことがわかるだろう。」

朱子「私が『大学』の中で「小学」について力説しているのは、古人は小学の課程の中で自然に基本を把握できてしまっているので、大学の段階で出来ないということがない。今の人は小学での習練がない以上は、敬を根本にしなければならぬからだ。」〔記録者楊驥〕

〔注〕

(1) 正大 『易経』大壮・彖伝に「正大而天地之情可見」とある。『語類』卷四・第24条は楊道夫録でこの語を話題に挙げている。「又問、如何見天地之情。曰、人正大、便也見得天地之情正大。天地只是正大、未嘗有些子邪處、一嘗有些子小處」。

(2) 所問涵養、致知、力行 『語類』本卷・第11条（本稿三八〇三九頁）参照。

(3) 某於大學中所以力言小學 『大学或問』卷上参照。

【^(校)一一五・27】

爲學之道、在諸公自去著力。且如這裏有百千條路、都茅塞⁽¹⁾在裏、須自去揀一條大底行。如仲思昨所問數條、第一條涵養、致知、力行、這便是爲學之要。〔驥〕

〔校注〕

〔校1〕楠本本は本条を卷一一四、朱子一一、訓門人二に収める。

〔訳〕

学問をする道は、君たち自ら努力することが大事である。たとえばここに数多の道があり、全てが茅でおわれ塞がっているとして、その中から自分で一本の大きな道を選んで行かねばならないようなものだ。仲思（楊道夫）が先に質問した数箇条中の第一条、涵養・致知・力行が学問をする上での要である。

〔記録者楊驥〕

〔注〕

(1) 茅塞 『孟子』尽心下「孟子謂高子曰、山徑之蹊間、介然用之而成路。爲間不用、則茅塞之矣。今茅塞子之心矣。」

(2) 如仲思昨所問數條 『語類』本卷・第11条及び第26条（本稿二八頁及び七六頁）を参照。

（第22〜27条担当 宮下 和大）